映画評

一般映画

『圧殺の海 第2章 辺野古』

2016年　森の映画社　109分

監督　藤本 幸久、影山 あさ子

堀川 慶治　スタッフ

今年の映画で特筆すべき映画といえば、やはり四日市出身の藤本が監督したこの映画である。第3章が完成すれば、『人間みな兄弟』など日本のドキュメンタリー映画の父、亀井文夫の流れを汲む土本典昭監督（藤本の師匠）の『不知火海』など水俣シリーズ、小川 紳介監督の『三里塚』シリーズに並び称される名作と呼ばれることは間違いない。現地で家を借りてスタッフ一同が住み込み、生活を共にしているからこそ撮れる映像と音声。迫力ある映像から伝わって来る被写体の活動家との一体感、信頼で結ばれた絆が、見て取れる。

キャンプシュワブ門前での工事車両・資材搬入車両の入構阻止の戦い、海上でのカヌーや小舟による抗議行動。これでもか、これでもか、と抗議行動が、繰り返される。第1章の最初の頃数十人で始まった行動が、日を追って膨らんでおり、連日数百人、時には数千人もの人々が身体を張って抗議している。

海上保安官や機動隊は、映像に残ることを避けるよう命令されているのだが、最大6人のカメラマンと協力者のヘルメットの小型カメラが、暴行現場を撮影し、記録している。撮影隊が存在していることが、間接的に市民を守っていることが、ヒシヒシと伝わってくる映画になっている。門前では、市民が座り込み、トラックの前に、時には下にまで潜り込んで横たわる。後半では夜中にコンクリートブロックを山と積んで、それを機動隊が片付ける間時間を稼ぐ作戦や、山城博治代表

の歌、おばあの表情など、ホッとする場面も多少はあるが、全編これ緊張の連続である。

しかし、よくこれを１００分に纏めたものだ。エンドロールの９分は、１万円以上の資金カンパをした人々の名前（それにしても、よくこれだけの人数の人々が）と歌なので、省く。藤本にとって追い風はある。土本や小川の時代はフィルムの時代で、膨大な製作費がかかったが、デジタル時代の到来で、無限に撮れるのだから。参院選後安倍政権は機動隊千人を派遣し県を提訴した。決戦の日は近い。

『ＫＡＮＯ１９３１海の向こうの甲子園』

西松　優　日本映画研究者

２０１５年　威視電影　１８０分
監督　馬志翔
脚本　魏徳聖、陳嘉蔚、馬志翔
出演　永瀬正敏、大沢たかお、坂井真紀

〝日本精神〟という言葉が、今でも台湾では〝勤勉、正直〟を表わす褒め言葉として使われるという。この作品は「１９３１年日本統治下の台湾で、嘉義農林学校（以下、嘉農）の日本人・漢人・高砂族混成で弱小な野球部が甲子園で準優勝を果たすまで」の物語だ。しかし、台湾人の馬志翔監督が本当に描きたかったのは、近藤監督（永瀬正敏）、水利技術者八田與一（大沢たかお）等当時の台湾で〝日本精神〟を体現した〝日本人達の生き方〟のように思える。近藤を通じて夢を実現するための厳しさと同時に時折悩む人間らしさやさりげない優しさを描き、当時の日本人達への〝敬意〟さえ感じられる。

３時間超のこの映画を長く感じさせないのは、明確なテーマと巧みな構成・カメラワーク、野球経験者を揃えたリアリティだ。前半では近藤が私財をなげうち、厳しいが差別のない指導により部員達の心技が飛躍的に向上する姿を挿話を織り交ぜながら描いていく。「あいつらもわしの子じゃ」は、近藤の頑固一徹だが私利のない一途な生き方を象徴する。中盤は台湾大会で破竹の進撃を続ける嘉農チームの様子を、試合中の選手達と町の人達の表情の頻繁なクロスカットとリアルな実況放送によって、緊迫感を作りあげる。そして、市民で溢れる優勝パレードと八田によるアジア一のダム完成の様子が交互に映し出され感動は一気に最高潮に達する。この畳み込むような作り方が本当にうまい。後半では嘉農の甲

子園決勝戦をじっくり見せるが、俳優が野球の経験者達で、投打に驚くほど迫力があり、知らぬ間に感情移入してしまう。また〝興奮と静寂〟の絶妙な間（ま）は更なる緊張感を生みだす。欲を言えば、挿話や試合のシーンを整理し２時間半ぐらいにするとさらに締まった映画になったと思う。

甲子園のライバルだった錠者大尉が嘉農の無人のグランドに立ち嘉農チームに思いを馳せながら死地の戦場に赴いていく。そしてラストの字幕で、その後部員のうち、台湾人は各分野で活躍し日本人の多くが戦死したと伝える。見終わると大きな感動と同時に切なさも残った。

なお、台湾の人々の日本への東日本大震災義援金は、世界で総額１位のアメリカとほぼ同額の２９億円、一人当たりの義援金額はずば抜けて１位であった。台湾の人たちの〝戦前の台湾の日本人の生き方への共感〟がここにも表れている気がする・・・。ＤＶＤも発売され、レンタルも可能なので、この映画をお勧めしたい。

『関の弥太っぺ』考

長谷川哲也　三重フェス

１９６３年　東映　８９分
監督　山下耕作
脚本　成沢昌茂
出演　中村錦之助、十朱幸代、木村功

「この娑婆にゃあ、悲しいこと、つらえことがたくさんある。だが忘れるこった。忘れて日が暮れりぁ明日になる。あー明日も天気かぁ。」

これは、昭和３８年１月に公開された東映作品「関の弥太っぺ」の中で語られるキーワードとなるセリフである。原作長谷川伸、監督山下耕作、脚本成沢昌茂、音楽木下忠司（木下恵介実弟）、出演中村錦之助・十朱幸代・木村功・月形龍之介など。

渡世人関本の弥太郎は常陸国結城の在で、ふた親はすでに亡くなっており、祭りの夜にはぐれた妹を探して旅暮らし。川に落ちた少女「さよ」を救ったことからその父親と知り合いになるが、父親から娘を甲州街道吉野宿にある旅籠沢井屋へ連れていってほしいと頼まれてしまう。

沢井屋へ向かう道すがら、弥太郎は上記の言葉をさよに語

りかける（1回目）。ようやく辿り着いた沢井屋では、「昔、すえという一人娘がいたが、人さらいにあって行き方知れずになっている。しかし、この子の母親がすえかどうかは分からない・・・」と言って引き取ることに難色を示す。交渉に行き詰った弥太郎は、さよの長逗留代と称して、再会した妹のためにと貯めていた45両を投げ出し、その場から立ち去る。

やがて妹の居場所をつきとめるが、妹は既に亡くなっていた。それから十年、心の支えを失った弥太郎は助っ人稼業に身を落とし、やくざ同士の果たし合いの場を次から次へと渡り歩いていた。

そんな折、老渡世人田毎（たごと）の才兵ヱから、美しく成長したさよのこと、そして彼女が十年前に自分を沢井屋へ連れてきてくれた渡世人を慕っていることを聞かされる。同席していた箱田の森助は、博打の元手に困ったとき、この話を思い出して沢井屋へのりこむ。沢井屋の窮地を救った弥太郎は、しばしの間、さよと会話をかわす。しかし、弥太郎の形相の変化もあって、さよは弥太郎を見ても気づくことができない。弥太郎は別れ際に冒頭のセリフを投げかけ（2回目）、去っていく。その時、さよの記憶がはっきりと蘇り、必死で弥太郎の後を追いかけるのだが、弥太郎は飯岡助五郎一家の待ち受けている、村はずれの一本松へ向かうところで終わるのである。

ここに登場する錦之助は、自然体で優しさと憂いを兼ね備えている。昭和30年代後半は、製作本数が徐々に減りつつあったとはいえ、まだまだ量産体制にあった頃で、錦之助は併行して内田吐夢と宮本武蔵を撮っていた。武蔵とは全く違うキャラクター～自身、どこまでも薄幸であるがゆえに、他人に対して優しい～弥太郎を、見事に演じきっている錦之助の芸域の広さを感じる。

特に後半、弥太郎とさよが生垣を挟んで会話をかわすくだりは胸にせまる。その生垣には木槿（むくげ）が植えられていて一面に薄紫色の花をたくさん咲かせている。しかし、その花は弥太郎とさよの住む世界（修羅と普通の暮らし）を遮断する非情な役割を担っている※。ふたつの世界は決して交わることが出来ないが、世間のあかに染まっていないさよは、弥太郎に対し、生垣を飛び越えてきてほしいとせがむ。そんなさよを弥太郎は、「お嬢さん、ありがとう。あっしはどこの旅先でいつ白刃が障子ごしに突き出るかわからねぇ身体でござんす。おうちにご迷惑がかかります・・・」と、言って優しくたしなめる。それでも弥太郎を慕うさよに対し、

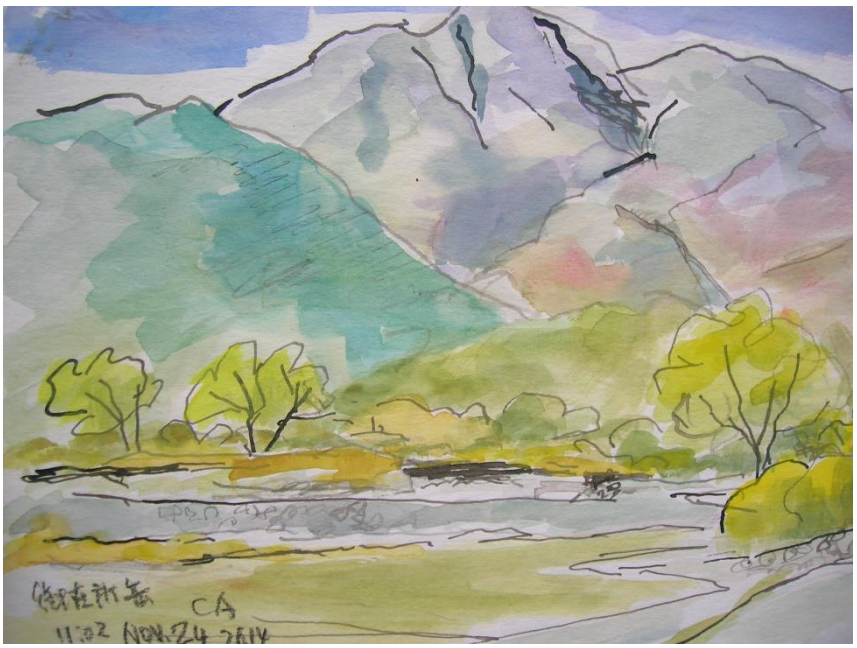
冒頭のセリフが投げかけられるのである。

話題は変わるが、平成２７年度下半期に、波留主演の連続テレビ小説「あさが来た」が高視聴率を上げたことは記憶に新しい。その主題歌「３６５日の紙飛行機」を、ＡＫＢ４８が歌っていたが、その中に次の一節がある。

「♪…時には雨も降って涙も溢れるけど。思い通りにならない日は明日頑張ろう…♪」

この映画が製作されてから半世紀以上が過ぎ、われわれをとりまく環境は大きく様変わりしているが、人々の営みはそれほど変わっていないのではないだろうか。昔から、ある時は前むきに、またある時は逆境も受け入れ、あきらめず明日は何とかなるさと願って生きてきたのではないだろうか。冒頭のセリフと「３６５日の紙飛行機」の歌詞を並べた時、そのようにふと思った。

いずれにしても、昭和３８年東映作品「関の弥太っぺ」は、量産体制の中で生まれた珠玉の名作のひとつであり、色褪せてない作品といえるだろう。

注※　マキノ雅弘　監修　浦谷年良

編著「ちゃんばらグラフィティー」